

Jackanapes における Grey Goose の表象

— 擬人化された鶯鳥からのメッセージ —

The Representation of the Grey Goose in *Jackanapes*: A Message from the Personified Goose

岡崎真衣

序論

文学には様々なジャンルの作品が存在するが、国や性別などを問わずに誰もが一度は手にする作品といえば、やはり児童文学であろう。そのような児童文学は一見単純であるように見えるが、そこには様々なメッセージが含まれている。例えば、読者の大半が子供であると考えれば、作品自体もしくは登場人物がいわば教育的な役割を果たしているとも言える。よって作品には寓意的な意図が多く織り込まれ、そのようなメッセージが作品の登場人物たちをとおして読者に伝えられることが多々あるのだ。そして、そうした作品に登場するキャラクターは必ずしも人間だけとは限らない。実に多くの児童文学作品において動物や物が擬人化されており、人間ではなく、あえてその擬人化された動物や物を通して読者（子供たち）にメッセージを送っているのである。とりわけ、その手段として動物に人間の言葉を話させるということが多く見られる。では、このような技法は作品にどのような効果をもたらすのだろうか。そこで、本論の軸として1883年に出版されたジュリアナ・ホレイシア・ユーイング (Juliana Horatia Ewing) の『ジャカネイプス』 (*Jackanapes*) という作品を採り上げる。

この作品は、ジャカネイプス (*Jackanapes*) という一人の人間の一生を軸に物語が展開さ

れていく。グース・グリーン (Goose Green) という小さな町に暮らすジェサミンお嬢さん (little Miss Jessamine) は軍人ブラック・キャプテン (Black Captain) と恋に落ち、駆け落ちをする。その後二人はグース・グリーンへと戻り、やがて二人の間に一人の男の子が生まれる。その男の子がこの物語の主人公、ジャカネイプスである。しかし、それからほどなくしてブラック・キャプテンは出征し、戦地で命を落としてしまう。ブラック・キャプテンの訃報を聞いたジェサミンお嬢さんは悲しみのあまり、我が子ジャカネイプスを残して自ら命を絶つ。彼女の死後、一人残されたジャカネイプスは、彼の大叔母にあたるジェサミンおばさん (Miss Jessamine) によって育てられる。ジェサミンおばさんがジャカネイプスのわんぱくぶりに手を焼きながらも、彼は立派な青年へと成長していく。やがてジャカネイプスは親友のトニー・ジョンソン (Tony Johnson) とともに若くして戦地へと赴くことになったのだが、危機に瀕したトニーを救おうとしてジャカネイプスは命を落としてしまう。

以上のように物語はジャカネイプスとその周囲の人々を中心に展開されていくのだが、ガチョウおばさん (Grey Goose) という人間の言葉を話す鶯鳥が物語の全編に渡って登場し、様々なシーンにおいて過去に起こった出来事を説明している。

以下の引用は、『ジャカネイプス』の第一文である。

Two Donkeys and the Geese lived on the Green, and all other residents of any social standing lived in houses round it (Ewing, 5).

この作品が人間を主体に展開している小説であるにも拘らず、本編の第一文の主語に、主役の人間を差し置いて動物 (Donkeys と Geese) を置いているということに違和感を覚えないだろうか。このような箇所は、第一章だけではなく、『ジャカネイプス』の全六章のうち半数の三章に見られる。さらに、その三章のうち第一章を除いた二章 (第二章と第四章) の第一文の主語が“Grey Goose”になっているのである。この「違和感」も同様であるが、とりわけ動物が人間の言葉を話すという奇妙な点を、『ジャカネイプス』に限らず、他の作品においても読者はある程度受け入れているようなのだ。一般的に鷺鳥 (鳥) は人間から見て下等動物として捉えられているにも拘らず、ガチョウお婆さんは作品中の様々なシーンに登場し、当然のように人間の言葉を話している。加えて興味深いことに、この作品において人間の言葉を話している動物はガチョウお婆さんのみなのである。作品中に何度も登場する点、そして唯一人間の言葉を話す動物であるという点から、このガチョウお婆さんには何らかの役割が与えられているのではないかと考える。本論は、このガチョウお婆さんが『ジャカネイプス』という作品においてどのような効果をもたらしているのかを考察するものである。

動物であるガチョウお婆さんが、人間の言葉を話すという能力を与えられ、そして物語の主人公ジャカネイプスに匹敵するほどの頻度で登場する点から、両者には何らかの特別な接点があると考えられる。そこで、まずジャ

カネイプスがいかなる人物であるか、またガチョウお婆さんがどのようなキャラクターであるかについてふりかえったあと、動物の鷺鳥がどのような象徴性を持ち合わせているかについても考える。

さらに、『ジャカネイプス』だけではなく他の多くの作品において、これまでたくさんの動物たちが擬人化されてきた点に注目し、擬人化がいかなるものでどのような効果をもたらすものなのかを見ていく。そして『ジャカネイプス』が書かれた当時の児童文学における擬人化がどのようなものだったかについても述べていく。また大変興味深いことに、この『ジャカネイプス』という作品は出版されたのが1883年、つまり19世紀末 (ヴィクトリア朝) であるにも拘らず、ストーリー自体は18世紀の世界観を反映しているのである。そこで、18世紀末から19世紀にかけての児童文学における動物の擬人化についても追って見ていくことにする。

これらを踏まえたうえでガチョウお婆さんがどのような存在であったかを考察し、人間とガチョウお婆さんの「英雄死」に対する考えの相違を比較することで、ガチョウお婆さんがもたらすメッセージがどのようなものなのかを探っていきたい。

1. ジャカネイプスとガチョウお婆さん

1-1 ジャカネイプスの人物像

ジャカネイプスという青年は一体どのような人物なのだろうか。彼の外見上、最も特徴的な部分が髪の色である。ジャカネイプスは、モップのような鮮やかな金色の髪を持ち、周囲からはいわゆる浮いた存在だった。彼の母親であるジェサミンお嬢さんもまた奇抜な色の髪を持っており、彼女の時と同様、ジャカネイプスのそれがジェサミンお婆さんにとっては、周囲とは異なるというただ一つの汚点

だったのである。冒頭でも述べたとおり、幼少期のジャカネイプスはとても好奇心旺盛かつ腕白な人物であった。例えば、ようやく歩き始めた頃に家を抜け出して通りすがりの豚に乗ろうとしたり、鷺鳥のヒナを追いかけて池へ飛び込んだり、そして時にはわざと水たまりに座り込んだりしてジェサミンおばさんだけではなく、周囲の人々を困惑させたのである。作品中に “As, on the other hand, Jackanapes (who had a boy’s full share of the little beast and the young monkey in his natural composition)…” (Ewing, 21) とあるように、まさにジャカネイプスという人間は、野性的で猿のような、いたずら小僧だったのである。しかし、そのようなわんぱくぶりを発揮する一方で、ジャカネイプスは激しく回転する回転木馬に乗り続けたり、またジプシーの少年が飼っていたポニーを乗りこなしたりしたことで、幼いながらも類まれなる馬術の才能を有していることを周囲に示すのであった。

そして、成長したジャカネイプスは親友のトニーとともに戦地へと赴き、命を落とすのである。ジャカネイプスは親友を助けようとして命を落としてしまう。一見すると彼は勇気にあふれた栄誉ある死を迎えたように思える。しかしながら、彼のこの栄誉ある死に異を唱える論がある。その前に、彼はどのように親友トニーを救い、死を迎えたのかを見ることにする。以下は、ジャカネイプスが親友トニーを救おうとする場面である。

He caught at his own reins and spoke very loud-“Jackanapes! It won’t do. You and Lollo must go on. Tell the fellows I gave you back to them, with all my heart. Jackanapes, if you love me, leave me!”[…]He turned with an odd look in his eyes that a vainer man than Tony Johnson might have taken

for brotherly pride. Then he shook his mop, and laughed at him.

“Leave you? To save my skin? No, Tony, not to save my soul!” (Ewing, 43)

この場面でトニーがジャカネイプスに自分を置いて逃げるように告げるのだが、ジャカネイプスはトニーを救わなければ、自分自身が救われないのだと言って、自らの命と引き換えにトニーを救うのである。そしてこのあと、ジャカネイプスは軍のテントにて上官に最期の言葉を残すのである。それは、愛馬口ロの行く末を誰に託すかというものであった。はじめ上官は、親友のトニーに託すことを提案するが、ジャカネイプスは「自分の馬を『侮辱されたくない』からという理由で」(上石、10)それを拒否したのである。このことからジャカネイプスは「偽善的」な面を持ち合わせた人物である(上石、10)ということがわかる。つまり、多かれ少なかれジャカネイプスという人物は「虚栄心」を持っていたのだ(上石、10)。ここに、ジャカネイプスの「名誉」への執着が見られるのである。

このように、ジャカネイプスの死は完全に栄誉ある死ではなかったのかもしれない。いずれにせよ彼の人生は、一般的にはもちろん、長命を誇りとするグース・グリーンにおいては殊更、短いものであった。しかしながら、そのような短い人生であったにも拘らず、彼の人生を見ると、ジャカネイプスという人物は常に前へ前へと進み続ける人間だったと言えるのである。

1-2 ガチョウおばさん

一方、危険のなかへと自ら突き進んでいくジャカネイプスとは対照的に、ガチョウおばさんは平穩に長生きすることを第一に考える、安定を象徴するかのようなキャラクターである。

冒頭でも述べたように、ガチョウおばさん

は人間の言葉を話す唯一の動物として、さまざまな場面に登場する。そのほとんどが、過去に起こった出来事について説明している場面である。特にそれらの場面でガチョウおばさんの最大の特徴を見ることができる。例えば、“The Grey Goose remembered it well, it was Michaelmastide, the Michaelmas before the Michaelmas before the Michaelmas-but, ga, ga!” (Ewing, 12) とあるように、ガチョウおばさんが何かを思い出そうとすると鳥の頭では処理しきれずにわけがわからなくなってしまうのである。つまり、ガチョウおばさんの最大の特徴というのは記憶力の問題なのである。さらに、彼女は物事を淡々と説明するという特徴も持ち合わせている。「ユーイング夫人は、脇役の人物や動物は勿論のこと、ささいな事まで、あくまでも冷静に客観的に、事実を記述する」(吉井、142) ということから、ガチョウおばさんの客観的なものの見方は作者の影響を強く受けていると考えられる。

この特殊なキャラクターの役割とは一体どのようなものなのか。ここで具体的にガチョウおばさんの役割について次の二点を挙げたい。①ユーモアの要素と②人間に対する皮肉である。ガチョウおばさんが様々なシーンにおいて過去に起こった出来事を説明している点から、語り手としての役割を担っている可能性があるとも考えられる。しかしながら、彼女が記憶力の問題を抱えている点と実際に物語を進行している語り手が別に存在している点から、この役割をガチョウおばさんが担っている可能性は低いと考える。よって、先に挙げた二点に注目する。

ではまず、①ユーモアの要素から見ていく。この『ジャカネイプス』という作品は子供向けの作品と言われているが、当時の子供たちにとって、ユーイングの作品は難しすぎたようである(神宮、141)。しかしながら、ユーイングの作品にはユーモアがあふれている。

ユーイングは作品中にまじめなくだりを、それが子供たちには難しすぎるようであっても、様々なところに散らばせている。彼女は、そういった「道義的な教訓がたいくつにならないように、かならずユーモアで明るさをそえる」(スミス、260) (下線部引用者) ののである。この「ユーモアで明るさをそえる」というところに注目したい。これは、まさにガチョウおばさん自身の役割に当てはまるのではないだろうか。

例えば、ガチョウおばさんは“it was Michaelmastide, the Michaelmas before the Michaelmas before the Michaelmas-but, ga, ga!” (Ewing, 12) と思い出しながら言っている。イギリスではミカエル祭に鶯鳥の肉を食べる習慣があり、その日に鶯鳥を食べると一年中お金に不自由しないという言い伝えがあるそう(加藤、180)。そのような習慣があるにもかかわらず、ガチョウおばさんはその日のことを思いだそうとしているのである。これはユーモア以外の何ものでもないだろう。『ジャカネイプス』において、「たいくつにならないようにユーモアを添える」キャラクターが存在するならば、それはガチョウおばさんぐらいなのだ。

また、「ユーイング夫人は、大事件などおこりそうもないくらしをしている人びとを描いている」(スミス、259-260) とあるように、彼女の作品のテーマは日常生活である。この日常のなかに非日常的な人間の言葉を話す鶯鳥が登場する点においても、実にユーモアに富んでいると言えるだろう。さらに、次の箇所はまるで言葉あそびをしているかのようである。

“What’s the use?”

Said the Goose” (Ewing, 25)

“use” と “Goose” で韻を踏んでいるところに注目したい。それも「ガチョウおばさんが言っ

た」と言っているのである。このように言葉あそびを取り入れている点からも、ガチョウおばさんが『ジャカネイプス』という作品にユーモアの要素、大きく言うならば、児童文学的要素を与えていると考えられるのではないだろうか。

次に、②人間に対する皮肉を見ていく。確かに、ガチョウおばさんは①のように作品にユーモアを与える存在として非常に大きな役割を担っていると考えられるが、おもしろさとは反面、人間に対して非常に厳しい皮肉も与えているのではないだろうか。彼女の持つ特徴として「冷静に物事を観察し、淡々と状況を説明している」ことを挙げた。ここから、彼女の人間に対する皮肉が見えてくるのである。例えば、戦時中のことを説明している時でも、彼女は客観的に人間を観察しているのだ。いわゆる鳥頭の鷺鳥に、このように観察されることは、人間にとってはいささか侮辱されているように感じられるだろう。

また、“And then what did they do but drill the ploughboys on the Green, to get them ready to fight the French, and teach them the goose-step!” (Ewing, 7) (下線部引用者) という箇所が本文にある。『ジーニアス英和大辞典』によれば、この“goose-step”は(ひざを曲げず脚を高く上げる行進歩調)を意味するという。つまり、平穩に長生きすることを誰よりも大切にしているガチョウおばさんが登場しているにも拘らず、“goose”(鷺鳥)と戦争を関連づける単語が作品中に含まれているのである。平和を愛する鷺鳥が相反する戦争を連想させる言葉として使われる。これは読者の笑いを誘うとともに、皮肉の要素が含まれていると言えるだろう。加えて、この皮肉をより効果的にする要素がこの作品には存在すると考える。それについては、後で詳しく述べることにする。

1-3 鷺鳥のシンボルと Jackanapes

ガチョウおばさんに限ったことではなく、鷺鳥は様々な文学作品に登場する。例えば、一番有名な鷺鳥はやはりマザー・グースだろう。このほかにも様々な作品に鷺鳥(鳥)は登場する。そのなかで自らが持つ象徴性を反映したキャラクターも少なくない。では、鷺鳥とはどのような象徴性を持っているのだろうか。

鷺鳥は母性や創造、豊饒、太陽、愛を象徴するとともに自惚れや愚かさも表わすといわれる(フリース、289-290)。また、鷺鳥が紋章として使われた場合、才略に富んだ人、自己犠牲を表わすことも同書において言及されている。この「才略に富み、そして自己を犠牲にした」というのは、まさにジャカネイプス自身を指しているのではないだろうか。ここにジャカネイプスとガチョウおばさんの関連性を垣間見ることができるのである。

そもそも、“Jackanapes”とは一体どのような意味なのだろうか。辞書の定義では、“Jackanapes”は生意気な人、うぬぼれ屋、いたざらっ子、悪たれ小僧を意味しているとある。ここで、鷺鳥が紋章に使われた場合の象徴を振り返りたい。辞書にある意味の「うぬぼれ」、そしてジャカネイプスという人物の人間性、「才略に富む」、「自己犠牲」という点でジャカネイプスとガチョウおばさんの間にきわめて重要な共通点が存在する。また、次の引用からもジャカネイプスと鷺鳥をつなげるものが見られる。

When the other chicks hopped and cheeped on the Green about their mother's feet, this solitary yellow brat went waddling off on its own responsibility, and do or cluck what the speckled hen would, it went to play in the Pond. (Ewing, 17-18) (下線部引用者)

また、以下の引用においても同様である。

Now he was his own master, and might, by courage and energy, become the master of that delightful, downy, dumpy, yellow thing that was bobbing along over the green grass in front of him. (Ewing, 19) (下線部引用者)

以上の点、とりわけジャカネイプスのモップのような金色の髪の毛とヒヨコの羽毛から、鷺鳥とジャカネイプス、両者を連想することができる。このようにジャカネイプスと鷺鳥は、今挙げた点で同調していると言えるのではないだろうか。

2. 児童文学における擬人化

2-1 擬人化の定義と効果

これまで何度も「擬人化」という言葉を用いてきたが、そもそもこの「擬人化」とは一体どのようなものなのだろうか。『児童文学事典』では次のように説明されている。

人間以外の動植物やその他のものに、人間と同じ属性を与えて描く方法をいう。例えば、犬が人間のことばをしゃべるといったこの方法は、児童文学によくみられる方法の一つである。これは、人間以外の動植物やその他のものに、人間と同じ属性をみる、子どもの中のアニミズム傾向の強さに対応するものであって、昔話にも普通にみられる。(安藤、188) (下線部引用者)

「アニミズム」についても、同事典で以下のように説明されている。

語源はラテン語の anima (魂・呼吸・生命)。万物に霊が宿り、それを崇拜する古

代信仰に由来するが、一般的には生命のない事物に、あたかも人間とおなじような生命や意志があるかのように感じることで、文学におけるすべての擬人化された物語の成立要件となっている。(原、18)

以上のように辞書が言う「擬人化」とは、人間以外の動物や植物などに「人間の要素」を与える表現技法なのである。また、「擬人化とは、辞書の解釈にしたがえば、見立ての表現技法となる。人間以外のモノを人間になぞらえて描くことになるわけで、あくまで人間主体、人間中心の考え方がそこにある」(大藤、81)ということからも、擬人化された動物のなかには人間性が少なからず潜んでいるということがわかる。

では、具体的にこの「擬人化」はどのような効果をもたらすのだろうか。小沢正は著書『童話の方法』のなかで読み手への効用として次の二点を挙げている。「コッケイ味」と「安心感」である。まず、「コッケイ味」とは動物などが人間のような動きをしたり、言葉を話したりすることで笑いが生まれる効果のことである。次に「安心感」は擬人化を通すことである問題を直接に受けることなく、読み手が一定の距離をおいて作品を眺めることができるという効果であると述べられている。また、読み手だけではなく書き手への利点も擬人化という表現技法は持ち合わせており、それが「抽象性」であるとも指摘している。つまり、書き手が深刻な問題や事件を根底に据えて書くことができるというのだ。

『ジャカネイプス』のガチョウおばさんも、これらの効果を持ち合わせているのではないだろうか。1-2 においては、ガチョウおばさんが児童文学らしさを演出する効果を有している可能性を指摘した。この彼女が持つユーモアの役割から「コッケイ味」という点があてはまるだろう。「安心感」についてもまた、ガチョウおばさんが「安定」を好むキャラクター

であることから、読者に安心感を与えていると考えられる。

さらに前述のように、擬人化された動物のなかに「人間性」が潜んでいるということ、そして「擬人化された作品、いかえれば人間が投影された作品ではとうぜんのことながら、登場人物（動物）は人間と動物の二重性をもつ」（浜、78）ことから動物と人間の間に同調性が存在する場合があると考えられるのである。擬人化本来の役割、鷺鳥の持つ象徴性、「擬人化の二重構造」（柴村、64）そしてジャカネイプスとガチョウおぼさんの共通点。これらを考慮すると、ジャカネイプスとガチョウおぼさんの間に同調するものがある可能性はより高くなるだろう。この両者の同調性については、後で詳しく述べる。

2-2 18世紀末の児童文学における擬人化

「十八世紀は子どものための文学が生まれた時代」（神宮、65）とあるように、イギリスでは18世紀半ばから子供を読者の対象とした長編物語が多く出版されるようになった。そのなかで擬人化された動物が登場する作品も数多く書かれたのだが、そうした作品の多くが現実世界を舞台にしたものであった（多田、9）。この当時の擬人化された動物の役割については以下のような言及がある。

こういった作品では、動物や物が語り手として設定され、その語り手が人間の子どものよい例・悪い例を数多く見聞きしたことになっており、読者に対し、人間以外の視点から、自分達の行状を省みる機会を与えようという意図のものが多かった。そのため語り手の動物による観察・批判には、往々にして作者の価値観が反映されており、結果として動物が人間に近い思考を備えることになった。（多田、9-10）

やがて18世紀末になるとイギリス社会では「理性」が尊重されるようになり、子供向けの本においても空想的要素を取り入れることが好ましくないとされるようになってしまった（多田、10）。しかしながら、完全に擬人化された動物が登場しなくなったわけではなく、物語を面白くする手法として彼らは読者の前に現れたのである。理性が重視されるなか、彼ら動物たちは現実の動物的要素を残したまま、人間と同じようなものの考え方をすることで、作品に登場したのである（多田、10）。この傾向は、18世紀末から19世紀初頭にかけて見られた（神宮、179）。

では、具体的に18世紀末の動物の擬人化とは一体どのようなものだったのだろうか。「当時の作品で、動物が主要なキャラクターとなるものの多くは、動物が自らの生涯を、その時々に出会った人間のことを中心に語る」（多田、11）とあるように、いわゆる自叙伝形式が18世紀末の主流だったのである。また、人間の観察者となり人間の行動にコメントを加える役割を担うようになった（多田、11）。

以上の特徴を『ジャカネイプス』のガチョウおぼさんと照らし合わせると、非常に多くの点で一致するようなのである。例えば、ガチョウおぼさんが作品中に登場する人物について詳しく説明していることから、その時々に出会った人間のことを中心に語るという点で一致する。また、ジャカネイプスの人生の観察者であるかのように彼の人生を追い、そして周囲の人間のことも観察していることから人間の観察者になるという点とも一致するのである。

2-3 19世紀の児童文学における擬人化

18世紀から19世紀にかけてイギリス社会は産業革命によって大きく発展した。19世紀の児童文学においても18世紀末の精神的で抽象的なものより「理性」を重んじるという思想が、イギリス社会を大きく包み込んでい

た。そのため18世紀末から19世紀初頭にかけての作品は教訓的なものが主流だった(桂、11)。とりわけ、「19世紀の児童文学は、主として女流作家たちによるリアリスティックな作品の時代」(神宮、110)だったのである。『ジャカネイプス』が出版されたのは1883年つまり19世紀末、いわゆるヴィクトリア朝であるが、まさにこの時代はイギリスが繁栄をきわめた時代であった。もちろん、児童文学も例外ではない。イギリスの児童文学はこの時期(1860年頃から1930年頃)に黄金時代を迎えた(高田、2)。前に述べたように、この当時は「理性」や「道徳」を重んじる風潮が社会を支配していた。そうした世界の重圧、堅苦しきから逃げるためのものかのような作品がこの時代に登場し始めたのである。その代表作がルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』である。この作品の特徴である「ナンセンス」が、教訓色が強かった当時の児童文学において大変好評だった(神宮、115)。この作品に登場する擬人化された動物は、当時の擬人化の特徴そのものである。お茶を飲んだり、洋服を着たりと人間がすることを動物がするというのが当時の、いわゆるヴィクトリア朝の擬人化の特徴であった。『ジャカネイプス』もヴィクトリア朝に書かれた作品であるが、ガチョウおばさんが必ずしもこの時代の擬人化の特徴を反映しているとは言えないのではないだろうか。なぜなら、彼女は『不思議の国のアリス』に登場する白ウサギのように服を着ていたり、時計を持っていたりと人間がすることを模倣しているわけではないからだ。ガチョウおばさんは、あくまで動物、つまり鷺鳥としての立場や要素を保ちつつ、人間の言葉を話しているのである。

また、このヴィクトリア朝時代の人々の文学における動物に対する考え方にも当時の特徴が表われている。ヴィクトリア朝の絵画に描かれた動物たちは、人間がするようなことをしているというのだ。例えば、「犬がトラン

プをしたり葉巻を吸ったり」(ターナー、124)と、動物を人間化しているのである。道徳や理性を重要視するこのような時代にあって、自分たちの道徳的な基準を強化するために動物を利用したのである。人間界の基準を動物界に投影させ、動物を誤りやすい人間の鏡とし、動物から人間の「道徳」を学ぼうとしたのだ(ターナー、128)。

さらに、次の引用からは当時のファンタジーがヴィクトリア朝を生きた人々にとって重要な役割を果たしていたことがわかる。

現実社会において到達することが不可能な理想の風景、文明が破壊の限りをつくしてきた豊かな自然、異なる者たちが仲良く暮らす親密な世界の喪失。英米児童文学の黄金期の作品の多くは、現実の彼方に存在した、あるいは文明化により消えつつある自然へのまなざしが生みだした、時代錯誤のファンタジーなのである(高田、58-59)。

産業革命によって確固たる地位を築き、多くの富を手に入れたイギリス社会であったが、その反面で昔の風景や自然を失ってしまったのである。失われた懐かしい風景を取り戻すかのように、この当時のファンタジーは存在していたのであろう。

これまで18世紀末から19世紀末にかけての児童文学における擬人化の特徴について述べてきた。『ジャカネイプス』におけるガチョウおばさんは動物本来の要素を保ちながら人間の言葉を話し、人間の観察者となり、そして出会った人間について語るという点で当てはまることから、18世紀末の擬人化の特徴が組み込まれていると言えるだろう。これは、この作品がただ18世紀末の世界観を反映させているだけではなく、作品中に登場する動物の擬人化の技法まで18世紀末の特徴を反映させているということ、つまり、細部にま

で18世紀の世界観が浸透しているということなのである。

3. 『ジャカネイプス』におけるガチョウおばさんと人間

3-1 ユーイング作品の特徴と『ジャカネイプス』

ユーイング作品の特徴に関して「ユーイング夫人の作品は、子どもに教訓を学ばせるための読み物と、子どもおよびかつて子どもだった人たち、言い換えれば、大人の中に存在する子どもを楽しませるための読み物、と大別できよう」(吉井、138-139)という記述がある。特に注目したいのが、「大人の中に存在する子どもを楽しませるための読み物」という特徴である。このタイプに属する作品は「しばしばセンチメンタルな、或はノスタルジックなという形容詞を伴って批判の対象とされる」(吉井、139)。また「彼女の作品の欠点としてあげられるストーリーの単調さ、及び構成上の欠陥は、概してこのタイプの長編ものにあてはまる」(吉井、139)というのである。このストーリーの単調さが他の作家では見られないキャラクターへの影響をもたらしているということが次の引用からわかる。

起伏のない平板なストーリーであるのは、素材が主として日常生活に求められているからであり、加えて長編の作品では、主人公以外の登場人物など、中心となるストーリーと直接関係のない場面にまで、作者の関心と注意とが均等に向けられた結果である(吉井、139)。

ガチョウおばさんもそうした産物の一人、いや一羽なのだろうか。確かに、彼女は「平板なストーリー」を主軸にする『ジャカネイプス』において、きわめて強い存在感を放っている。そもそも『ジャカネイプス』は前に

挙げたユーイング作品の二つのタイプのうちどちらにあてはまるのだろうか。この作品は子ども向けの小説なのであるが、率直に言って「大人の中に存在する子どもを楽しませるための読み物」にあてはまる部分が大いのように感じられる。この特徴と作品を比較すると、「平板なストーリー」や「素材が主として日常生活」、また、批判の対象かどうかはさて置き、「センチメンタルな、或はノスタルジックな」という点において一致するからである。さらに、作品が子供には難解であるというのも理由の一つである。前者の「子どもに教訓を学ばせるための読み物」とも捉えられないこともないが、一致する特徴の多さから見て、どちらかと言えば『ジャカネイプス』は「大人の中に存在する子どもを楽しませるための読み物」のタイプに属すると考えられるだろう。つまり、児童文学として世に出たこの『ジャカネイプス』という作品は、実際に読む子どもたちだけではなく、この本を子供に与える大人たちにも何か訴えるものがあつたのではないだろうか。

3-2 ジャカネイプスとガチョウおばさんの同調性

ジャカネイプスという人物は、わんぱくであり周囲の人間を困らせる存在であったが、自らの才能を開花させ、危険の中へと身を投げてでも何かを追い求める人物であった。一方で、ガチョウおばさんはいつもと変わらぬ日常を追い求める、いわば不変的なキャラクターである。この両者は一見、正反対の性質を持ったキャラクターであるように思えるのだが、前述したように、ジャカネイプスとガチョウおばさんの間にはきわめて重要な共有点が存在する。では、具体的にその共有点は何のような働きをしているのだろうか。

ガチョウおばさんは記憶力に問題があり、これがユーモアや滑稽さを演出していた。しかしながら、彼女は記憶力の問題を抱えなが

らも肝心なことは決して忘れていないのである。それが次の引用からわかる。

She never got farther than “last Michaelmas,” “the Michaelmas before that,” and “the last Michaelmas before the Michaelmas before that.” After this her head, which was small, became confused, and she said “Ga, ga!” and changed the subject.

But she remembered the little Miss Jessamine with the “conspicuous” hair (Ewing, 6). (下線部引用者)

また、以下のブラック・キャプテンがグース・グリーンへやってきた日のことを、ガチョウおばさんが思い出す場面においても同様のことが見られる。

Besides, the Grey Goose never saw Bony, nor did the children, which rather spoilt the terror of him, so that the Black Captain became more effective as a Bogy with hardened offenders. The Grey Goose remembered his coming to the place perfectly (Ewing, 7-8). (下線部引用者)

このように、記憶力に問題があると言われていながらもかわらず、ガチョウおばさんは本当に大切なことはきちんと覚えているのである。この点を考慮すると、ガチョウおばさんが「愚かな」鷺鳥であるというのは、いささか疑問である。実は、彼女はただ「愚か」に見せているだけなのではないだろうか。

ガチョウおばさんのモットーは、“Running away was her pet principle; the only system, she maintained, by which you can live long and easily, and lose nothing” (Ewing, 25) とあるように安全に、長生きすることで

ある。彼女は長生きするために自らを愚かに見せているのではないだろうか。もしそうならば、ガチョウおばさんは才略に富んだ鷺鳥であると言えよう。愚かに見せていただけで、本当は才略に富んだ鷺鳥が冷静に人間を観察し、過去に起こった出来事を淡々と説明する。まるで、本当に愚かなのは人間の方であると言わんばかりに。これほど皮肉なことはないだろう。それと同時に、これによって人間に対する皮肉がより効果的になっていると言える。そして、そこにガチョウおばさんからのメッセージが隠されていると考える。

また非常に興味深いことに、ジャカネイプスの死後、ガチョウおばさんは一言も人間の言葉を話さなくなってしまうのである。彼女が作品中、最後に登場するのは次のジャカネイプスの葬式をグース・グリーンで行なっている場面である。

The Grey Goose is sensible of an atmosphere of repose, and puts up one leg for the night (Ewing, 50-51).

ジャカネイプスの葬式を行なうこと、つまり、ジャカネイプスとの同調性があるならば、ジャカネイプスの死を周囲が認識することによって、ガチョウおばさんに内在するジャカネイプスと共有する人間性も死を迎えたと考えることはできないだろうか。

このように、ジャカネイプスとガチョウおばさんの間に同調性が存在すれば、前述したガチョウおばさんの人間に対する皮肉がより大きな効果を発揮することになるのである。

3-3 Goose Green における英雄死

『ジャカネイプス』の物語はどのようにして結末を迎えるのだろうか。この物語は、ジャカネイプスの英雄死に対する人間と鷺鳥の考え方が分かれていることが述べられ、平和に暮らすこと以上に大切なものとは何なのかと

いうことを呈示して終わる。この最終章で語られる人間とガチョウおぼさんの意見の相違は、ガチョウおぼさんのメッセージがどのようなものであるかという疑問の答へとつながると考えられる。以下は、人間と鷺鳥の英雄死に対する意見が述べられている箇所引用である。

On the contrary, Mrs. Johnson said she never to her dying day should forget how, when she went to condole with her, the old lady came forward, with gentlewomanly self-control, and kissed her, and thanked God that her dear nephew's effort had been blessed with success, and that this sad war had made no gap in her friend's large and happy home circle (Ewing, 48-49). (下線部引用者)

ここでは、トニーの母親ジョンソン夫人 (Mrs. Johnson) が出席した、ある老婦人の甥の葬式で夫人が感じたことを述べている。下線部にあるように、この老婦人の甥の死によって、つまり彼の英雄死によって、残された人たちは友人関係や家庭において円満を手に入れることができたというのである。ジョンソン夫人はこの時の出来事をあげて英雄死を讃えているのだ。

しかしながら、一方でジェサミンおぼさんとはいうと、彼女は手塩にかけて育てた息子同然のジャカネイプスが英雄死したことを喜んではいけないのである。それが、次の引用からわかる。

“But she's a noble, unselfish woman,” sobbed Mrs. Johnson, “and she taught Jackanapes to be the same, and that's how it is that my Tony has been spared to me. And it must be sheer goodness

in Miss Jessamine, what can she know of a mother's feelings? And I'm sure most people seem to think that if you've a large family you don't know one from another any more than they do, and that a lot of children are like a lot of store-apples, if one's taken it won't be missed.” (Ewing, 49)

この箇所はジョンソン夫人がジェサミンおぼさんに、夫人にはまるで売り物のりんごのように子供がたくさんいるから一人が戦死したとしても何ともないのだろうと言われ憤慨し、子供を産んだことがないジェサミンおぼさんには母親の気持ちはわからないと言っている場面である。ここからもわかるように、ジェサミンおぼさんは、息子同然のジャカネイプスの死が英雄死扱いられていることに納得がいかないようなのである。彼女は、あの老婦人が言及していたようにはいかなかったのだ。つまり、ジャカネイプスの死からは悲しみ以外何も得ることはなかったのである。ジャカネイプスの死を悲しみ、英雄死を讃えることに異を唱えた彼女は、小さな共同体グース・グリーンにおいて、彼女が手を焼きながらも育て、愛したジャカネイプス同様、はみ出し者になってしまった。しかし、そのような人間の行動を、冷静にそして客観的に観察していたガチョウおぼさんもまた、ジェサミンおぼさん同様、英雄死を讃える人間の行動が理解できないでいるのだ。この作品は語り手によって次のように締めくくられている。

Very sweet are the uses of prosperity, the harvests of peace and progress, the fostering sunshine of health and happiness, and length of days in the land.

But there be things-oh, sons of what has deserved the name of Great Britain, forget it not!-“the good of” which and “the use of” which are beyond all calculation of worldly goods and earthly uses: things such as Love, and Honour, and the Soul of Man, which cannot be bought with a price, and which do not die with death. And they who would fain live happily EVER after, should not leave these things out of lessons of their lives (Ewing, 52).

以上のように語り手は、ガチョウおばさんが愛する平穏な暮らし以上に大切なものが存在し、それが「愛や名誉、人間の魂」であると断言しているのである。しかしながら、これは語り手が人間であるがゆえに、このように述べているのではないだろうか。グース・グリーンにおいても、また現実社会（ヴィクトリア朝）においても、自らの命よりも名誉、道徳を守ることが重要視された。現実と虚構の世界、その両者においてもその思想、時代の流れに逆らえないのが人間なのである。しかし、ジェサミンおばさんのように、その考えに異を唱えるものが、ごく少数であれ必ず存在するはずである。そのような人間を支えるため、そしてその道徳を重んじる世界に疑問を投げかけるために、ガチョウおばさんは人間の言葉を持って存在したと考えられるだろう。

この作品が18世紀末の影響を強く受けていることから、読者が自分たちの行動を省みる機会をガチョウおばさんは与えていると考えられるのである。ガチョウおばさんによって、作品に大きな効果もたらされていることは明白であろう。

結論

これまで見てきたように、ガチョウおばさんは作品中において、きわめて重要な役割を果たしているということが言えるだろう。彼女は、児童文学における擬人化された動物としての役割を果たしているとともに、我々人間にむけて重要なメッセージも送っているのである。

紋章の鷲鳥が示す「才略に富む」とは、決してジャカネイプスのように名声を手に入れることだけを示しているわけではないとガチョウおばさんは言っているのではないか。死をもって名声を得ることよりも、彼女のように生きることを選択することが才略に富むということであり、生よりも死によってもたらされた名誉を選ぶ者こそ本当の意味での“Jackanapes (愚か者)”であるというのが、ガチョウおばさんから送られたメッセージなのではないかと考える。歴史上の戦争を作品に登場させたことでそのメッセージは、読者にとって、より現実味を増したものになったとも言えるだろう。戦争によって多くの人間が互いに殺し合い、命を落とし、そして人はそれを英雄死と賛美する。尊い命を、形を持たない名誉のために捨てるという人間の馬鹿げた行為に警鐘を鳴らすため、ガチョウおばさんはこの『ジャカネイプス』という作品において人間の言葉話すという能力を与えられたのだと考えることができるのではないだろうか。

それは約120年前の人間だけに向けられたことではなく、現代の我々、そして時を超えて全ての人間たちにむけられた皮肉でありメッセージでもあるということを忘れてはならないのである。この作品が出版された1883年当時に比べて、現代はさまざまな面で発展を遂げてきた。しかし、そのように発展した現代であっても、いまだに人間は争い、互いの命を奪い合うことをやめようとはしない。

ヴィクトリア朝時代の人々は、産業革命によって繁栄を得たが、それと引き換えに昔ながらの自然や大切な何かを失った。彼らと同様、現代人もまた、さらなる発展と引き換えに「命」の尊さ、つまり、大切な何かを忘れてつつあるのだ。そのような人類にとってこそ、この『ジャカネイプス』に登場するガチョウおばさんの存在というのは非常に重みのあるものになると言えるだろう。果たして、「死」に英雄などありうるのか。「名誉」は、生きることを、そして平穏をあきらめてまで手に入れるべきものなのか。転じて、生きることは何なのか。ガチョウおばさんは人間に対してこのような疑問をなげかけているのではないだろうか。我々は今、真剣に再考すべき課題を、自分たちより劣ると考えてきた動物から与えられたのである。最後に、以下の『ジャカネイプス』の引用をもって本論の結論とする。

“‘What’s the use?’

Said the Goose” (Ewing, 25)

「命を粗末にするようなことをして一体何の得があるんだい？」と鷺鳥は言いました。(拙訳)

参考文献

- 上石実加子「ジャカネイプスは勇敢な軍人だったのか? — ニックネームを「借用」したユーイングとキプリング —」イギリス児童文学学会編『TINKER BELL』第52巻、2007年3月、1-14頁
- 安藤美紀夫「擬人化」日本児童文学者協会編『児童文学事典』東京書籍、1988年、188頁
- 大藤幹夫「擬人化にこめられた世界 — 動物学的な作品を中心に —」日本児童文学者協会編『日本児童文学』第40巻6号、1994年6月、80-84頁
- 小沢正『童話の方法』青弓社、1985年
- オールティック、リチャード・D『ロンドンの見物物I・II』小池滋監訳、国書刊行会、1989-1990年
- 桂宥子「第1章 児童文学の黄金時代 — その特色と意義」桂宥子・高田賢一・成瀬俊一編著『英米児童文学の黄金時代 — 子どもの本の万華鏡 —』ミネルヴァ書房、2005年、2-20頁
- 加藤憲市『英文学動物ばなし』松柏社、1964年
- 小西友七・南出康世編集主幹『ジーニアス英和大辞典』大修館書店、2001年
- 坂井妙子『おとぎの国のモード — ファンタジーに見る服を着た動物たち』勁草書房、2002年
- 柴村紀代「児童文学における“擬人化”の意味とその行方」日本児童文学者協会編『日本児童文学』第40巻6号、1994年6月、60-68頁
- 神宮輝夫「十九世紀 — 前期・後期」瀬田貞二・猪熊葉子・神宮輝夫『英米児童文学史』研究社、1971年、92-150頁
- 杉本善子・吉井紀子・秋田友子「ジュリアーナ・ホレイシア・ユーイング — 自由への憧れ」ニュー・ファンタジーの会編『野に出た妖精たち』透土社、1993年、86-170頁
- スミス、リリアン・H『児童文学論』石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男訳、岩波書店、1964年
- タウンゼンド、J. D.『子どもの本の歴史 英語圏の児童文学(上)(下)』高杉一郎訳、岩波書店、1982年
- 高田賢一「第3章 自然へのまなざし — 児童文学の黄金時代とその想像力」
- 桂宥子・高田賢一・成瀬俊一編著『英米児童文学の黄金時代 — 子どもの本の万華鏡 —』ミネルヴァ書房、2005年、40-59頁
- 多田昌美「18世紀末及び19世紀初頭の英国児童文学作品に見る動物ファンタジーの先駆的要素 — 子どもとしての擬人化及び動物コミュニティ —」三宅興子先生退職記念論文集刊行会編『児童文学研究を拓く』翰林書房、2007年、9-28頁
- ターナー、ジェイムズ『動物への配慮 — ヴィクトリア時代精神における動物、痛み、人間性 —』斎藤九一訳、りぶらりあ選書/法政大学出版局、1994年
- チェスタトン、G. K.『G・K・チェスタトン著作集 8 ヴィクトリア朝の英文学』安西徹雄訳、春秋社、1979年
- 鶴見良次(a)「鷺鳥おばさんとその鷺鳥について — イギリス伝承童話とパントマイム」研究社『英語青年』第136巻9号、1990年12月、430-434頁

- (b)「学者動物について——フランス革命論争とバーソロミュー・フェア」富山太佳夫編『現代批評のプラクティス4——文学の境界線』研究社出版、1996年、93-128頁
- (c)『マザー・グースとイギリス近代』岩波書店、2005年
- 中野節子「母と娘と——『ヴィクトリア朝』時代の妖精たち」ニュー・ファンタジーの会編『野に出た妖精たち』透土社、1993年、5-26頁
- 浜たかや「動物ファンタジーという装置」日本児童文学者協会編『日本児童文学』第40巻6号、1994年6月、75-79頁
- 原昌「アニミズム」日本児童文学者協会編『児童文学事典』、東京書籍、1988年、18頁
- フリース、アト・ド『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他共訳、大修館書店、1984年
- リトヴォ、ハリエット『階級としての動物——ヴィクトリア時代の英国人と動物たち——』三好みゆき訳、国文社、2001年
- Cousin, John W. *Biographical dictionary of English literature*. London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1910.
- Ewing, Juliana H. *Jackanapes, and Other Tales*. London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1945.